

序

ヨーロッパやアメリカに出かけた人は、経験されていると思うが、かの地の人達は、例えばホテルへ入るとき、続いてあとから来る人があると、かりにそれが見ず知らずの東洋人であろうと、自分が通ったドアを押えて待っていてくれる。

日本人は、一般にそういうことはしない。あとから誰がくるだろうかという注意すらしない。それからエレベーターに乗って、もし互いに目が合ふと、彼等は会釈をする。朝だと「お早う」と言う。われわれは、相手が他人だと、なるべく目を合わさないようにする。

ところが一方で、日本人は行動が集团的であり、彼等は個人的だとよく言われる。このことと上に述べた現象とは、一見矛盾するように見える。しかし、これは多分、個人の他者あるいは集団に対するかかわり合いの違いではないかと考えられる。

われわれの場合は、個人がある特定の集団の中に逃げ込み埋没するのであり、彼等の場合は、個人がまずその特異性を確立して、その特異性をもって他者または集団にかかわって行こうとするものと思われる。

このかかわり合いが、もし積極的自主的、かつ建設的でないと、個人の特異性はあっても、集団の中で孤立してしまう。

今、盛んに行われている TQC の推進の中でも、一人一人の役割りが明確であることが要求されているが、役割りという概念の中には、個人としての機能と同時に、他に対するかかわり方も含まれている。

これからの日本が発展する為には創造的な研究開発が大きな要素となるが、そのような仕事には、やはり西欧人的やり方の方がよいと思われる。まず、個を確立することで、最初から皆と一緒にお神輿を担いでいては駄目であろう。

しかしそのあとが大切で、自主的に組織にかかわって行って初めて、個人の価値が生れるのである。いずれにしろ行動の根底にあるのは自主性、独自性であって、それが個をも組織をも生かすことになるのである。

1982年10月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 烏田 専 右